

フルート二重奏

ぷろぐらむ

- ・愛の挨拶 / エルガー
- ・アルルの女よりメヌエット / ビゼー
- ・フライミートゥーザムーン その他

プロフィール

小池穂波 / 埼玉県出身。8歳からフルートを始める。武蔵野音楽大学卒業。東京音楽大学大学院科目等履修生修了。フルートを中條秀記、宮下英士、相澤政宏の各氏に師事。第23回日本クラシック音楽コンクールフルート部門全国第3位。第21回JILA音楽コンクール管楽器部門第3位。第19回長江杯国際音楽コンクール管楽器部門第1位及び中国駐大阪総領事賞受賞。ユニクスカルチャーセンター鴻巣、アリオ深谷カルチャー等でフルート講師として勤務。現在、首都圏を中心とした演奏活動や、オンラインレッスンなど指導活動にも力を入れている。

鈴木愛 / 福島県出身。5歳からピアノ、14歳からフルートを始める。郡山女子大学附属高校音楽科を卒業。武蔵野音楽大学器楽科を卒業後、桐朋音楽大学研究科を修了。フルートを白尾隆、白尾彰の各氏に師事。第14回全日本演奏家協会ルブリアンフランス音楽コンクール奨励賞受賞。第16回長江杯国際音楽コンクール第1位。武蔵野音大在学中には、卒業演奏会にも出演。第44回東京オペラシティにてフルートデビューリサイタルに出演。現在は、ソロ、室内楽の演奏の他、講師を務めている。

境内の北、旧中山道に面したところにある、伝道掲示板の令和4年3月に掲載するものを紹介します。

伝道掲示板

blogから

伝道掲示板には1ヶ月にひとつの言葉を紹介しています。経典の引用であったり、詩や小説のなかの言葉であったりします。道ばたの1メートル四方の掲示板ではお伝えできない、ことばの周辺はblogに載せています。

九月のことば

泳ぎても泳ぎても此岸かな

稲沢 上田克彦

秋彼岸の九月。今月の言葉は、令和五年八月五日付け、日経新聞俳壇への投稿句です。

まずは、選者の俳人・横澤放川師の批評はとうと。

「面白うてやがてほんに悲しきだ。代も変つて昔なら隠居の齡であっても、省みれば一生といふのまだまだこんなことなのかねえ」

俳人の評をわが体験にかさねてみれば、若い頃は歳を積んだ先輩方は気分の変調も少なく、判断力もすぐれ、間違いなど起こさない

大人物ばかりだと尊敬もうしあげていました。だが、しかし。自分がそうした年齢になっても、理想郷（彼岸＝ひがん）からはほど遠く、相変わらず気は短く、腹はたつことばかりで、失敗ばかりの毎日（此岸＝しがん）です。

なんてことを友人に嘆いたら、同年齢の友人が「あたりまえじゃん。俺らが年寄りになりつつあるんだから、年寄りなんて信用できないよ。」



千田完治

まあ、年上だからという理由だけでは、誰も尊敬などしてくれないのが現代です。でも、現代の年寄りだけが、いくじなしかとうとそんなことはない。趙州（じょうしゅう・779～897）という中国は唐の時代の禅僧がおられました。六十一歳で出家して百十八歳の長寿を全ったという怪物です。その怪物が次のような言葉をのこしています。

「たとい百歳の老翁なりともわれよりおとられんは、われ、かれをおしうべし。たとい七歳の女なりとも、われよりもすぐれば、われ、かれにとつべし」
作家・吉川英治の名言、「我以外皆師」の心境です。みな師なのですが、特に幼い子どもの「なぜなぜ、どうして」の問いかけは、物の本質をとらえていずしりとぎます。

だから、ラジオの「こども電話相談室」は聞いて面白く、教えられることが多かった。でも、相談室でたくさんのおこもの「なぜ」に答えつづけて、七月に亡くなった無着成恭さんは晩年「平成に入ったところから質問がつまらなくなった」と憂いていたという。無着師は曹洞宗の禅僧でもありました。幼いこどもの、「なぜ」まで面白くなくなつたとしたら、師はどこにいるんだ！

【編集後記】その2

◇紙面の都合で、「編集後記」（その1）と（その2）でお送りします。有り体にいえば、紙面が余ったから（その2）でうめてしまえ、というわけ。余白にしてもよいのですが、余裕とかゆとりかとは無縁な性格なもので、お許しを。

◇ゆとりとは無縁な性格と書きましたが、数日前に長野県本曾まで日帰りで往復しました。目的地は有名な妻籠の宿まで、20キロあまり。長野県と岐阜県の県境までは30キロの木曾路の奥深く。そんなところへ何をしに行ったかというと、松岩寺の先住職ともご縁のあった木曾の寺で新しい住職を迎える晋山式（しんざんしき）を秋にやるので私が呼ばれたわけ。でも、あいにく先約があつて、欠席せざるを得ない。そこで、お祝いを持参して参上したのです。「そんなもの、電子メールで欠席を伝えて、お祝いは郵送か銀行振り込みすればよいのに」。そんな声が聞こえてくるけれど、それではあまりに味気ない。ゆとりのある交わりをまもるためには、余裕がなくても、それなりの儀礼が必要なのではないですか。

◇どうにか正午までに木曾路の奥深くまでたどりついてお祝いを済ませたので、もう一つの年に一度の勤めを果たすために松本市へ向かいました。松本城から遠くない市の中心部には、私の氏姓である花岡家の菩提寺があつて、今も墓地があるのです。浄土宗の寺に寄り、ご挨拶し、寺から離れた高台にある墓地へ向かいます。信州の広い青空と市街地が見わたせる墓所でお経を読み、慌ただしく帰路につきました。私の一日だけの夏休みでした。でも、こういうの嫌いではないのです。